

第32回BELCA賞 ロングライフ部門選考評

BELCA賞選考委員会 副委員長 鎌田 元康

今回・第32回のBELCA賞受賞物件数は、ロングライフ(LL)部門1件、ベストリフォーム(BR)部門8件となった。ここで、前回・第31回までのBELCA賞受賞物件の選考方法、表彰物件数の推移などを振り返ってみると、第1回～第10回まではロングライフ部門、ベストリフォーム部門の部会制による選考を行っていたが、第11回からはひとつの委員会にて両部門の選考を行うこととなった。当初から変わっていないのは、表彰物件数を「両部門合わせて10物件以内」としていた点で、両部門の合計が10物件を超えたことはなく、第3回・第6回・第7回に10物件を下回ったが、その他の回は10物件が選定されてきた。ただ、各部門の表彰物件数は回ごとに異なっており、前回までの表彰物件数の最低、最高は、LL・BR部門ともに3物件、7物件であった。今回の表彰件数はLL部門が1物件、BR部門が8物件、両者合わせて9物件と、部門ごとの表彰件数の差が最大となるとともに、ひとつの委員会で両部門の選考をするようになった第11回以降初めての両者の合計が10物件を下回る結果となった。

LL部門で唯一表彰に値するとして選定されたのは、国際基督教大学のキャンパス内に建つ教職員、学生の交流場として日本で最初に構想された学生会館兼講堂といわれるヴォーリス建築事務所の設計による1958年竣工のディッフェンドルファー記念館（東棟）である。

ディッフェンドルファー記念館（東棟）では、モダニズム建築の特徴である外壁のコンクリート打放しやバルコニーのPC製手摺、初期の国産アルミサッシ、コペンハーゲンリブの内壁などの意匠を注意深く維持していること、2020年以降の外装内装と空調、電気、給排水、バリアフリーまでの広範かつ極めて適切で、今日の機能水準を満足する改修が行われていることが高く評価された。アルミサッシの交換で気密性の高いサッシに交換しているが、珍しい初期のアルミサッシの細身でシャープな表情を残すために肉厚で細い四方枠とし中棧は一枚ガラスの表面に付け枠とし、当初のデザインを踏襲している点、講堂のヴォーリス建築の和洋折衷デザインを象徴する網代天井とコペンハーゲンリブが丁寧に修繕されている点など、多くの箇所、現地視察に参加した選考委員一同が感心させられ、LL部門の表彰件数が1件だけと残念な結果であったものの、深い感銘を受け、高い評価を与えうるものと判断された。

三井所委員長の選考総評には、“・・・3件は屋根の大改修、耐震補強、設備の更新、性能向上など大規模な改修をしたためベストリフォームに応募されたであろうが、用途も変わらず、長寿命化を目指しているので、ロングライフ部門の建築物とみることもできよう”とある。ロングライフ・ベストリフォームのどちらの部門に応募するかは申請者の意思に任されており、それがBELCA賞の特徴の一つであり、尊重されるべきと考えるが、部門1件の表彰物件となった場合は、各表彰物件の選考評が作成されていることから、部門選考評は割愛するなどの方策を考えるべき時機にきていると思われる。